

緑爽会会報 No. 145

2016年8月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～

7月例会 講演会/暑気払い

「知られざる山・道なき山を尋ね歩く―『続 山頂渉猟』に寄せて」

荒井 正人(記録)

期日： 7月12日(火)

講師： 南川金一会員

出席者：山本良子、田村佐喜子、松本恒廣、関塚貞亨、吉田理一、渡部温子、川嶋新太郎、鳥橋祥子、大島洋子、島田稔、富澤克禮、夏原寿一、瀬戸英隆、田井具世、川口章子、小泉義彦、西谷隆亘、西谷可江、荒井正人、小原茂延（20名）

7月12日、脳までとろけそうな暑さの一日となったこの日、南川金一さんの約1時間の講演があり、それに続き恒例の暑気払いが開催された。

定刻に全員が揃い、冒頭富澤代表の司会で会が始まった。南川さんは平成14年にもご講演いただいているほか、会報にも寄稿いただいているので会員もよくご存知と代表も紹介された。(南川さんの経歴や前回の講演内容については会報No135に詳しいので、ぜひ再読をお勧めします)

今回は昨年11月に出版された「続山頂渉猟」の抜粋「無名峰へのこだわり―まえがきに代えて―」から「目次」までの写しを資料としてご用意いただき、まずはなぜそのような山登りに至ったかについて語られた。最近、信濃毎日新聞の書評欄に著書が取り上げられ(記事の写しあり)嬉しかったとのことだが、それは南川さんの思いを理解し、書評でその点をきちんと書いているからだと言われた。やはり資料に付けていただいた、重廣恒夫関西支部長の新聞記事にある言葉「登りたい山を見つけ、ルートを調べ、身体を鍛え、必要な装備を選び、技術を身につける、それぞれの段階に登山の喜びと醍醐味があるのに、自ら放棄し、業者に丸投げする。世の流れとはいえ残念です。」も同じように、最近の登山の有り様に一石を投じているが、南川さんはこのプロセスを現実に実行されているのだ。信濃毎日新聞の評者にもきっと最近の山登りに対する思いがあったのだろう。それが「日本の山の再発見」という言葉に共感をもたらしたのだと思う。

もう一つの大きなテーマは、「山登りは先人の肩にのって先へ上へ進むものだ」との言葉。



撮影：小泉義彦

これは木暮理太郎の生誕記念碑に刻まれているもので、生まれ故郷の群馬県太田市での除幕式のこと、が会報「山」402号に掲載されている。記念碑は当時会長の西堀栄三郎博士が揮毫されている。この「先人の肩にのって」のフレーズについて、どこかで読んだと南川さんが調べていくと「山」206号に第二百回小集会の報告があり（いずれも資料あり）、松方三郎副会長の閉会挨拶「エベレストに登ったハントはいくらえらいといっても、先輩、後輩の秩序の中で学んでいるのである。アルプスからコーカサス、そしてヒマラヤへと伸びたその山登りは、いずれも先輩の肩の上に乗ったものであるということがよく理解されている。」に行き着く。今の私達も、先人の肩に乗って一歩でも半歩でも進むべきだと思うと南川さんは話された。時間がなくなって最後は急ぎ気味となったが大変有意義な講演内容であった。（当日の資料を要望される方には差し上げますので、事務局に申し出てください）

暑気払いには遠く松本から田村さん、新潟からいつものように越乃寒梅を携えた吉田さんが見えになり、皆さんからの差し入れのお酒がテーブルに林立した。料理は、これもいつものように渡部さん、川口さんが用意されて講演前に準備された。関塚さんの乾杯発声で開宴し、途中折角だからと全員近況報告することになった。多くの会員が南川さんの講演の感想を述べられたが、それだけ印象深かったということで、お持ちいただいた著書はサインもいただけるというので完売?! 和気藹々の内に閉会となった。

～～《寄稿/投稿》～～

映画「エベレスト 神々の山嶺」 山岳ロケこぼれ話

堀井 昌子(日本登山医学会)

この3月12日にロードショーになった映画、「エベレスト神々の山嶺」の最後に流れたテロップを、ごらんになった緑爽会の方から映画にまつわる裏話を書くようにとの連絡をいただきました。

この映画の山岳ロケ班には冬季エベレストサミッターで、日本山岳協会会長である八木原罔明氏以下スタントマン役もこなすプロクライマーが勢ぞろいしており「登山部」と呼ばれていましたが、この登山部から2014年の秋風の立つころ、私と都立病院勤務でNPO 富士山測候所を活用する会でも活躍している井出里香ドクターのところにネパールの映画ロケ班に帯同できる女医さんを探してほしいという依頼がありました。俳優さんとスタッフに女性がいるからというのがその理由でなるほどと納得しましたが、四週間も職場を離れることが出来る医師はそう右から左へと出てくるものではありません。やむなく日本登山医学会事務局の了解のもと、一斉メールで呼びかけをして手を挙げてもらうことにしました。個人情報保護を徹底すると身動きが取れないことがままありますね。幸い三人のいずれも若い山好きの女性医師から返事を貰いました。そして検討の結果、テロップで流れたように「ネパール山岳帯同医師 末田 南」が誕生したのですが、一番の決め手はこの長期ロケの期間を束縛されないという彼女のライフスタイルでありました。へき地医療の経験もあり、なんでもオーケーのドクターですが、キャストやスタッフの節制よろしきを得て実力発揮に至らなかったようです。この六月初旬に学会で逢いましたが登山部の一人であった女性ガイドさんと一緒に山歩きをしているというのめり込みよう、私は若い時にはもう戻れないのだからと背中を押してしまいました。

さて、山岳ロケ隊はルクラからエベレスト街道をトレッキングしていくのですが、2015 年は 3 月上旬というのにナムチェバザールで 80 センチの積雪があったということで、朝陽が当たらないナムチェの村内の道は雪がガチガチに凍っていたとか。撮影基地はエベレストベースキャンプ（5350m）まで 2 - 3 時間の標高 5150m のゴラクシェプです。全員が無事到着したのは立派だと思います。高山病についてのレクチャーを紙で受け、年配の方には高所登山のための健康診断、さらには低酸素室でのトレーニングも忙しいなか体験していただきました。キャスト、スタッフとも禁酒・禁煙のお触れが出て、カトマンドウを出るときに喫煙者は全員タバコを段ボール箱に入れさせられたと聞き、私たちの意見が容れられたことをうれしく思いました。

登山部のクライマーには実登山に近くというこだわりがあります。例えば日本から持ってきた天幕が単独登山用にしては大きすぎるとか、役者さんのピッケルの持ち方、振り方が不自然という具合です。羽生がテントの横でザイルを巻きながら深町と話すシーンがありますが、そのザイル捌きは横山勝丘、今井健治クライマーの特訓の賜物で、八木原氏も“様になっている”、“役者はすごい”という評価。この阿部寛さんはアイスクライミング訓練を長野県南佐久の岩根アイスツリーで受けたようです。

ところで撮影基地が落ち着いた頃に原作者 夢枕獏氏、挿絵画家の寺田克也画伯、落語家林家彦いち師匠、そして長野のそば屋「山猫亭」の太田伊智雄さん一行がゴラクシェプに到着しています。そば打ちと落語はギネスブックに申請の予定とか。国内ロケは宝剣岳、三つ峠、冷凍倉庫、東京の街などが挙げられていましたが、ブリザードは群馬県利根の川場村で撮影されています。本番で使われたブリザードの出所を、機会があったら関係者に聞いてみようなどと思う堀井です。

映画プロデューサーからはロケ班の細かい予定表をいただいていたのですが、映画を作るということがいかに大変かということの一端が分った貴重な体験ではありました。2015 年 2 月 23 日朝にはキャスト・スタッフ全員が東京大神宮に集まってお詣りをしてお祓いを受け、同 28 日に本隊はネパールに向かって出国したのです。



ルームの玄関に掲示されたポスター

6月山行「芦ノ湖西岸を歩く」感想

平野 紀子

冒頭、当日参加のため、まず瀬戸さん、夏原さんに“ゴメンナサイ”を言おうとお2人を探しましたが、渡部さんが代理で事情が分かり、こういうことも起きるのだ、と納得。

一行8名、元気に出発。旧箱根街道の一部を登り、杉の大木、当時の踏み石、土の香りと共に遠い江戸を想像。舞台は芦ノ湖西岸に移り、片側は山の斜面、眼下は湖の狭い登山道を、道々に咲く樹々と花々に、“歩く図鑑”のようなメンバーが、いろいろ教えて下さり勉強になった。お昼には渡部さん、中村さん手作りのご馳走もいただき、湖の畔の休憩は、最後に私の連続クシャミに、瀬戸さんと夏原さんが、一行のことを心配して噂をしているに違いないと一同大笑い。

途中、トレイルランの元気な若者たちと会ったが、礼儀正しく道をよけてくれ、初めてトレイルランなるものを見た私は、小グループなら“あり”、多数では場所を選ばなければ“なし”と思った。

充実満足の一日、ありがとうございました。

*担当の2名一瀬戸は膝痛、夏原は痛風で欠席。お粗末！（夏原）

山の標高と三角点の標高

南川 金一

〔このテーマは、7月12日の緑爽会の集まりで話そうと考えていたのだが、私の不慣れで予想外に時間が経過してしまっていた。話の後に緑爽会の行事を控えているとあっては、それを最優先するべきであろうから、予定の時間で切り上げるべきだと考えて割愛した。夏原さんに何うと、今号の紙面に余裕があるとのことなので、投稿することにした。〕

山の標高は山の表看板のようなものであり、正確でなければならない。拙著『続 山頂渉獵』の執筆過程では、山の標高はすべて手持ちの2万5千図表記の数字を用いてきた。ところが、出版社からゲラ刷りが届いて、校正して返送する間際になって、国土地理院がホームページで公表している電子国土基本図による山の標高が以前の地形図の数値とかなり違っていることに気が付いた。拙著の巻末には、「1900 1:25,000級の山」として183山を標高順に整理した表を掲載することにしていたから、その数値が異なるということになると、数字を書き換えなければならないばかりでなく、その順番までもが変わってくるのである。ゲラ刷りの校正の段階でそのような変更をすることは、ミス元であり、避けるべきことは当然承知していたが、山の本において標高を示す数字が古いとあれば致命的な問題である。出版社の担当者に電話して、標高をすべてチェックして最新の数値に置き換えるとともに、巻末の「1900 1:25,000級の山」の表の山の順番がかなり入れ替わる可能性があること、すなわち、「ゲラが真っ赤々になるかも知れないが、事柄が事柄であり、了解してほしい」と頼んだのであった。すでにゲラ刷りになっているとあっては、本の中にそのような経緯を述べるスペースはない。「まえがきに代えて」の最後尾に4行のスペースを作り、必要・最低限度の説明だけは入れたのだが、舌足らずなのは当然のことであった。

山の標高が変わるようになった理由は、私の手持ちの2万5千図の山の標高は三角測量に基づくものであったのに対して、国土地理院の電子国土基本図の山岳標高の多くがGPS測量によるものになったことによる。国土地理院ホームページの解説は専門用語による説明なので素人には分かりにくい、私なりの理解に基づいて書けば、次のようなことらしい。明治以来の三角測量による測量値と1994年以降のGPS測量による数値に乖離が生じてきたため、その不整合を解消するために、全国約2万5000点の三角点で実施したGPS観測データから標高補正パラメータ（助変数）を作成し、パラメータを用いた計算による標高を算出した。2014年4月、国土地理院は全国の三角点約10万点の標高を改訂した数値を発表した。その時に、変更幅の大きかった山の標高についても発表があり、そのことは私も知っていたが、発表値は小数点以下が省略されていた。私は、山頂の三角点の標高がその山の標高と見做される場合は、小数点以下まで表記すべきであると考えから、整数値の標高では利用できない。いずれ、小数点以下1桁の数値が発表された時点でそれを利用しようと考えていた。ところが、国土地理院がホームページで提供している2万5千図情報も、いつしか、三角測量に基づく旧・図版から電子国土基本図に基づく新しい図版に変わり、それに伴って山の標高がGPS測量による数値に置き換わっていたのである。科学の発展の成果とあれば、最新の数値を用いるべきであろうと考える。

GPS測量により、1等点でも標高がかなり変わったものがある。国土地理院公表による小数点以下2桁の数字で本州中央部だけを上げれば、「竈塔山」（浅間山西方、東竈ノ登山頂上）2227.18m→2227.91m（+0.73m）、「黒法師岳」（南アルプス南部、黒法師岳頂上）2067.40m→2068.09m（+0.69m）、「大峠」（鯉沢西方、大峠山頂上）1907.61m→1908.25m（+0.63m）等である。もろろん、マイナスになった三角点もある。

山の標高、すなわち頂上の高さを示す数値は3種類あり、私は意識してそれを使い分けている。①三角点が山の最高地点に置かれていると見做される場合は、〔山の標高＝三角点の数値〕であり、2万5千図の表記どおりの小数点1桁までの数値を用いる。②山の最高地点に標高点がある場合は、〔山の標高＝標高点の数値〕であり、整数値で表記される。③山の頂上に三角点も標高点もない場合は、2万5千図の最も高い等高線の数値を採る。頂上の高さを x とし、最も高い等高線が 2000m とすれば、 $2000 < x < 2010$ であり、上下で 10m 幅での差があるがそれは止むを得ない。この場合は 10m 単位の数値になる。もうひとつ、三角点標石が頂上から外れて肩のような地点に埋設されているケースがかなりある。2万5千図をよく見れば分かることなのだが、往々、三角点の標高が頂上の高さとして誤用されている。この場合は③と同じで、2万5千図の最も高い等高線の数値を採るとともに、「三角点の標高は…m」と注記を加えることにしている。

三角点が頂上から外れた所にあるにもかかわらず、その数値をもって頂上の高さとして誤認されている山の1つに岐阜・富山県境尾根上の寺地山がある。2万5千図「有峰湖」では、寺地山の頂上に 2000m の等高線が描かれている。写真左手前の石柱は農商務省山林局の主三角点であって、陸地測量部の三角点は頂上には置かれていない。陸地測量部の三角点〔3等点「大山」〕は頂上の西方約 100m、最高地点から少し下がった笹藪のなかにあり



岐阜・富山県境尾根上の寺地山頂上

(右の写真)、その標高が 1996.0m である。したがって、頂上の看板の表示は間違いである。写真は 2000 年に撮ったものであるが、その後、間違いが正されたのだろうか。この山に登った時、出会ったパーティーに「2000 年だからこの山に来たの?」ときいてみたが、キョトンとしていた。神岡町 (2004 年、合併して飛騨市に) には、1996 年に寺地山を“1996 年の山”として、テレホン・カードまで売り出して騒いだという“前科”がある。



何時間も藪を分けて頂上に辿り着き、頂上を覆う藪の下に三角点標石を見つけた時の感慨は大きい。本州中央部の山地の 1 等点の測量は 1881 年から、2 等点は 1902 年から、3 等点は 1904 年から始まっており、測量のための登山は近代登山に一步先んじるものであった。測量官の登山がその山の初登だったと考えられるケースが少なくない。測量官はどこの村人を案内として、どのようなルートで登ったのだろうか、選点するに当たって測量官は周辺の山にも登ったのであろうか、といった疑問が浮かぶ。測量官は、自分たちの登山を紀行文のような形で一般向けに発表することはなかったから、測量時の具体的な状況までは分からない。頂上の標石は黙して語らないが、標石には選点から埋石・測量に至るまでの苦労がこもっているのである。山の標高が GPS によって測られるようになったことによって、三角点が三角測量の基点としての使命を終えたとはいえ、その歴史的役割を忘れてはならない。

只見線沿線の山～山開きの頃

荒井 正人

これまで何度か「山開き」に参加している。最近では群馬県上野村の山開きに毎年参加しているが、主体的に参加しているのはこれだけで、山に行ってみたら、偶々行事にぶつかった、というケースばかりだった。

国民宿舎浅草山荘に予約を入れて行ってみると、翌日は山開きだという。それでマイクロバスに乗せてもらいネズモチ平から皆さんと一緒に登った。山頂で集合写真を撮り、記念バッジをいただいたが、私達は皆さんとお別れし、ヒメサユリ咲く只見尾根を田子倉駅まで下り、電車で帰ったのだった。昭和56年7月のことである。

あれから35年。この5月の連休に、友人が車を出してくれるというので、只見線沿線の山々を目指した。

只見線は平成23年夏の豪雨で大被害を受け、現在「只見駅」と「会津川口駅」の間は不通のまま。田子倉駅も今は無いが、沿線の現状を見たかった。

初日、電車の通らない会津蒲生駅に着いたのがお昼で、半日コースにちょうどいいと蒲生岳に登った。回遊ルートで下山し、美味しい湧き水を飲んだ。只見のキャンプ場に近い温泉に浸かってスーパーで食料・酒を調達し、バンガロー連泊をお願いした。温泉の脱衣所・浴室の壁には只見線の復旧に情熱を傾ける「鉄道風景画家」松本忠さんの絵が掛かっていた。休憩所には写真家、林明輝さんの「自然首都」の写真集が置いてあった。お二人は只見町にとって強い味方なのかも知れないと感じた。

翌日から車で登山口まで行っっては往復するスタイルで、まずは会津朝日岳へ。続いて御神楽岳、浅草岳と、いろいろハプニングはあったが、残雪、花、岩稜などを満喫した。

さて最終日はどうする？ と戻る車中で作戦会議。目にしたポスター「只見四名山」のひとつに要害山ってあったねえと、駅舎内の観光センターへ立ち寄って聞くと、ついこの前の日曜に山開きがあったとか。ポスターには、これから続く日曜毎の山開き日程が書かれている。帰宅する日の朝に、705メートルの要害山に登って帰ろうという話になった。当日早朝キャンプ場を引き払い、駅前に車を置いて、一登りして戻るとちょうど観光センターがオープンするところ。半分冗談のつもりで「私達この5日間で只見四名山に全部登りましたが、何か記念のものないですか？」と尋ねると、受付の女性は真剣になって「じゃ他の山は未だ山開きが終わってないので、要害山の記念バッジを差し上げましょう」と言って近くの町役場へ小走りで行ったかと思うと、「ハイ、これを記念にどうぞ」とモリアオガエルのデザインのバッジをプレゼントしてくれたのだった。

「いやーごめんなさい催促しちゃって、帰ったら只見をPRしますからね！」とお土産を少しと、松本忠さんの大きなポスターを買って求めた。私も只見線の復旧復興を心待ちにしているひとりである。出来ることがあればお手伝いしたい。爽やかさを倍增させて只見線沿線の山旅は幕を閉じた。



～《トピック》～

自然保護全国集会 2016 に参加して

山川 陽一

緑爽会々員の参加者: 里見清子、渡部温子、小野純江、富澤克禮、山川陽一、尾野益大、川口章子、近藤雅幸(8名)

久しぶりに自然保護全国集会に参加させてもらいました。せっかく四国まで足を運ぶのであれば集会の前後で時間を作って剣山に登りたいと思ったのですが、どうしても時間が作れずかないせんでしたが、一度は訪ねたいと思っていた牧野植物園を見ることができたこと、多くの懐かしい面々と再会できたことなど、収穫の多い旅でした。

私的事情があって全国集会から足が遠のいて、というより日本山岳会の諸々の行事から足が遠のいて4年ほどになりますが、びっくりしたのは、ご無沙汰している間にメンバーが入れ替わって初めてお会いする方たちが半数以上いたことです。自業自得で当然と言えば当然ですが、少し寂しい気持ちになったことは否めない事実です。

今回の集会のテーマは「どうする山の野生動物との関わり」ということで、四国の山岳環境上大きな問題になっている日本シカの対策と絶滅が危惧されている月の輪熊の保護問題が取り上げられ、基調講演も四国支部の会員で高知大教授の石川慎吾さんが「SOS 三嶺の自然」と題してシカの食害の実態と現地団体の取り組みについてお話しされました。そのあと分科会に分かれてディスカッションが行われました。

シカ問題は、私が自然保護担当理事を務めていた7・8年前、委員会のメインテーマとして取りあげた問題です。また、この活動が発展して「山の野生鳥獣目撃レポート」が誕生し現在も山岳団体自然環境連絡会(7団体)の活動として引き継がれています。そんなこともあり、私にとって今回の集会のテーマは非常に興味深いものでありました。

集会の会場も四国が誇る牧野植物園であったこと、ならびに、テーマが地域で抱える今日的問題であったことはとても適切であったと思います。そもそも自然保護の問題は地域問題ですから当該地域で問題になっていることを取りあげるのがベストです。

ただ、問題を取りあげて全国のメンバーに知ってもらうだけでは片手落ちで、会合を通じて問題点を共有し、全国のメンバーと情報を交換し合い、多面的観点からディスカッションして、現状を打開して一歩進める糧を得るということが重要で、そこに全国集会を開催する大きな意義があります。そういう観点で今回の集会を考えてみると物足りない面が残ります。会場の関係で十分な時間が取れなかったという事情もあると思いますが、スピーカーのワンウエーのプレゼンテーションが主体で参加者の意見や議論の時間が限られていたこと、議論を踏まえて今後どうすべきか、という最も重要なところが欠落していたと感じました。今後主催者や関係者でフォローしてくれることを期待しています。(次ページにつづく)

↓牧野植物園入り口 撮影: 廣田博 自然保護委員会委員



個人的には、集会前夜高知の夜を気の置けない仲間と夕食を取りながら旧交を暖められたこと、集会会場から宿舎への移動時間を利用して、北海道の長谷川さんのレンタカーに便乗させてもらい道中積もる話をしながら、あの桂浜まで足を延ばせたこと、フィールドスタディーで牧野植物園を見学することができたことなど、楽しく過ごさせてもらいました。

かつては常に主催者の立場でしたが、今回一参加者として参加するのがこんなに気楽で楽しいものなのかと改めて感じた次第。主催者の皆様、四国支部のみなさまに深謝です。

～～《予告など》～～

9月山行 29日(木) 10時 飯能駅・改札口に集合 *雨天中止
コース: 飯能駅 → 天覧山 → 多峯主山(とうのすやま) → 本郷 → 飯能駅
歩行時間: 約2時間半
申込み: 9月27日までに下記担当者へ
瀬戸英隆
夏原寿一



10月例会 7日(金) 18時 104号室 (開催日が変更になりました。)
テーマ 「武田久吉と歩いた尾瀬」 穴田雪江会員
・日本山岳会の生みの親ともいうべき武田久吉。植物学者として尾瀬をこよなく愛した武田と昭和30年代に尾瀬を一緒に歩いた穴田雪江会員に、懐かしい映像も交え、エピソードをお話いただきます
*この講演会については、会報『山』にも掲載して広く参加を呼びかけます。

11月山行 5日(土)「湘南平に岡野金次郎碑を訪ねて」 担当: 松本恒廣
詳細は次号でお知らせします。

住所録の変更など
山川陽一

石塚嘉一



鳥海の夏

----- 編集後記 -----
映画「エベレスト…」で医療面にご尽力された堀井さんの「こぼれ話」は、映画作りの楽屋裏が見えて面白い。「タバコを段ボール箱に入れさせられ…」には、ここに至るまでの指導のご苦労が察せられる。
平野さんが6月山行の感想を「埋め草にでも一」と寄せて下さった。そのお気持ちありがたい。元気が出る♪南川さんの「標高」。そこまでは考えたこともなかった頂上のこと、山の楽しみは尽きない。
写真「鳥海の夏」は秋田の福田さんから。添えられたお便りには「猛暑の夏は標高の高い鳥海山に限ります」。
・報告: 前号の「初めてのネパールトレッキングの頃」の集合写真に写っておられる方々のうち、緑爽会会員以外の方々にも会報をお送りしたところ、「懐かしい」、「皆さんに会いたい」などのお便りをいただいた。それらは福田さんにお届けした。
猛暑が当りまえの日々。一雨欲しいと思えばドシャ降り。やはりどこかおかしい！ (夏原寿一)

カット: 中村好至恵 写真: 夏原寿一